



TITLE:

職工ノ災害扶助制度(工場法第十五條ノ施行)

AUTHOR(S):

戸田, 海市

CITATION:

戸田, 海市. 職工ノ災害扶助制度(工場法第十五條ノ施行). 經濟論叢
1916, 2(3): 386-411

ISSUE DATE:

1916-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/126974>

RIGHT:

學大科法學大國帝都京

叢論濟經

號三第

卷二第

論說

●在外正貨處分ニ就テ

法學博士 小川郷太郎

●穀物定期取引論

助教授 河田 嗣郎

●戦後ノ米國ニ於ケル歐洲移民運動ト日本移民問題(三完)

講師 米田庄太郎

研究

●職工ノ災害扶助制度(工場法第十五條ノ施行)

法學博士 戸田 海市

●家中工業ニ就テ

同志社大學教授 瀧本 誠一

●本邦出生率増加ノ原因(三完)

講師 高田 保馬

雜錄

●經濟雜話(二)

法學博士 田 島 錦 治

●南北米經濟關係ト日支經濟關係(戦後經濟問題)

法學博士 神 戸 正 雄

●歐洲戰爭ト其主要ナル社會學的因素

講師 米 田 庄 太 郎

●職工扶助令ニ就テ

助教授 山 本 美 越 乃

●英國ノ食料品ト物價

助教授 河 田 嗣 郎

●獨逸ノ市統計所小觀

教授 財 部 靜 治

●なるさす生誕百五十年記念會記事

講師 本 庄 榮 治 郎

研 究

職工ノ災害扶助制度

（工場法第十五條ノ施行）

法學博士 戸 田 海 市

一 工場法第十五條ノ法律上ノ意義

勞働者ノ業務上ノ災害ニ關スル工場法第十五條ハ、就業制限、及工場設備取締ト相並ンテ工場法ノ骨子ヲ爲ス所ノ重大ナ社會的立法テアルガ、本法制定ノ際ニ予輩ノ屢指摘シタルカ如ク本條ノ字句ハ甚タ不明不備テアツテ、圓滿ニ之ヲ實施スルコトハ至難ノ業テアル。工場法ノ施行期日モ差迫リ、政府ハ今回本條ニ關スル施行規則ノ勅令案要項ヲ公表シタガ、吾々ハ施行規則ヲ如何ニ定ムヘキヤヲ考ヘル前ニ、先ツ本條ノ法律上ノ意義ヲ明確ニスルコトヲ必要トスル。固ヨリ此ノ如キ法律解釋ノ問題ヲ取扱フコトハ専門法學者ノ任務テアツテ予輩ノ研究ノ本領ニハ屬シナイ。予輩カ此解釋問題ニ關シテ以下述フル所ハ自カラ法律上ノ解釋ヲ下サントスルヨリモ、寧ロ工場生活ノ實際ヨリ見テ如何ニ之ヲ解釋スレハ雇主勞働者双方ノ要求ヲ調和シテ工場法ノ精神ヲ貫クニ

便ナルヤヲ考へ、以テ専門學者ノ研究ヲ促カサントスルノデアル。

工場法第十五條ノ文句ハ下ノ如クテアツテ、鑛夫ノ業務上ノ災害ニ關スル鑛業法第八十條ヲ其儘ニ採用シタモノテアル

工場法第十五條 職工自己ノ重大ナル過失ニ依ラスシテ業務上負傷シ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ工業主ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ本人又ハ其ノ遺族ヲ扶助スヘシ

本條ノ解釋ニ付テハ種々ノ問題ヲ生スルテアラウガ、予輩ハ下ノ三問題ヲ最も重要ナモノト認メ
ル

一本條ニ由ル工業主ノ義務ノ性質

本條ニ規定スル工業主ノ義務ハ勞働者ニ對スル損害賠償責任即チ汎キ意義ニ於ケル不法行為ニ基ツク責任ナルヤ、從ツテ雇主ハ本來ノ不法行為即チ其故意又ハ過失ニ由テ勞働者ニ業務上ノ災害ヲ蒙ラシメタ場合ニモ民法ノ適用ヲ免レ、本條施行令ニ由テ定メラルル扶助ヲ實行スレハ足ルヘキヤ、將タ本條ノ義務ハ損害賠償トハ全ク異リ、雇主ト云ヘル地位ヨリ生スル所ノ扶助扶養ト云ヘル特別ノ義務テアリ、從ツテ雇主カ民法上損害賠償ノ責ヲ負フヘキ事由アル場合ニハ、勞働者ハ必シモ本條ノ扶助額ヲ以テ甘んズルヲ要セス、損害ノ生シタル限リハ如何ニ巨額ニ上ルモ民法ノ規定ニ由テ之ヲ請求シ得ヘキヤハ、最先ニ研究ヲ要スル問題テアル。災害ニ罹ツタ勞働者カ雇主ニ故意又ハ過失ノアツタコトヲ立證スルノハ通例困難テアリ、又勞働者カ災害ニ罹レハ忽チ其日ノ生計ニ苦シムコトトナル故、此ノ如キ證明ノ手續ヲ踏シテ損害賠償ヲ請求スルノ遑ヲ有タナ

イ。從ツテ本條カ實施セラレタナラハ勞働者ハ通例之ニ由テ扶助ヲ請求スルコトトナルチアラウガ、併シ本條ノ雇主ノ義務ノ性質ヲ決定スルコトハ法律問題トシテハ重要ナ事柄デアル。卑見ニ由レハ本條ハ特別ノ扶助義務ヲ定メタモノテ損害賠償ノ一般規定ヲナイ。我國ノ社會的立法ハ尙ホ極メテ幼稚デアル、然ルニ獨リ本條カ本來ノ意義ニ於ケル不法行為カ存在セスシテ、即チ雇主ノ故意又ハ過失ナクシテ起ツタ災害ニ付テモ一種ノ不法行為ノ存在スルカ如ク見做シ、之ニ付テ本來ノ不法行為ノ場合ト同シク賠償責任ヲ負擔セシムルカ如キ急進主義ヲ採ツタト見ルコトハ穩當デナイ。特ニ社會的立法ノ大ニ發達シタ先進國ニ於テモ特定ノ工業中毒症ノ場合ヲ除キ、一般ノ業務上ノ疾病ニ關シテ負傷ト同様ナ賠償責任ヲ雇主ニ負擔セシメタ例ハナイノデアルガ、獨リ我工場法ハ業務上ノ疾病ヲ負傷及死亡ト全然同一ニ取扱フテ雇主ニ重大ノ責任ヲ負ハシメテ居ル。故ニ本條カ損害賠償ノ規定テアルトスレハ寧ロ常識ヲ逸シタ急進主義ト云ハネイナラヌ。之ト同時ニ本條カ損害賠償ノ一般規定テアリ、從ツテ雇主ニ故意又ハ過失ノアル場合ヲモ含ムモノトスレハ、其賠償額ヲ相當ニ大ナルモノトセネハナラヌ。然ルニ本條ノ母法タル鑛業法第八十條ニ由ル扶助額ハ實際ノ損害ヲ償フニハ極メテ不充分ナモノテアリ、又工場法制定ノ際ニ政府ハ本法ノ扶助規定モ大體鑛業法ニ準スルコトヲ公言シ、現ニ今回發表シタ勅令案ハ多少ノ増額ヲ爲シタトハ云ヘ、損害賠償トシテハ甚タ不充分ナモノテアル。故ニ本條ヲ損害賠償ノ規定トスレハ名實相反スルノ甚シキモノトナル。更ニ立法技術ノ上ヨリ見ルモ、若シ本條ニシテ損害賠償賠ヲ定ムルモノテアルナラハ、扶助スヘシト云ハスシテ損害ヲ賠償スヘシト云フヘキテアリ、特ニ民法ノ

不法行為ノ規定ノ適用ヲ一般ニ除外スルト同時ニ、雇主カ故意ニ勞働者ヲ災害ニ罹ラシメタ場合ハ矢張り民法ヲ適用スルコトヲ明示スヘキテアルガ、本條ニハ凡テ此等ノ用意ヲ缺イテ居ル。要スルニ本條ハ損害賠償ヲ定ムル急進主義ヲ採ツタモノゾナク、在來雇主カ勞働者ニ對スル同情ヨリシテ可ナリ汎ク實行シツツアツタ災害扶助ノ事實ヲ公ケニ認メ、以テ之カ實行ヲ確實ナラシメシトシタモノト解スルコトカ穩當デアラウ

二業務上ノ負傷ト疾病ト死亡トノ意義

(1) 本條ヲ以テ雇主ノ扶助義務ヲ定メタモノト見ルトキハ勞働者ノ業務上ノ負傷及死亡ト疾病トヲ同一ニ取扱フコトハ怪ムヲ要シナイヤウデアルガ、併シ之ヲ同一ニ取扱フコトハ本條ノ解釋ヲ非常ニ困難ナルモノトナラシメタ。先ツ業務上ノ負傷ニ付テ見ルニ、先進國ニ於テハ概テ其範圍ヲ餘程擴張シテアル。例ヘハ機械ノ掃除注油等ヲ業務トセル勞働者カ其機械ニ觸レテ負傷シタ場合ハ勿論、食事其他ノ用事ノ爲メニ工場内ヲ通行セル際ニ積荷ノ墜落ニ由テ負傷シタ場合ヲモ業務上ノ負傷トシ、更ニ工場ノ建物外ニ出ツルモ未タ其構内ニ留レル間ニ同様ノ負傷ヲ爲シタ場合ヲモ含マシメ、業務執行ノ爲メテナクトモ其執行ニ際シテ起ツタ負傷ハ廣ク業務上ノ負傷トシテ取扱フ。嚴正ニ云ヘハ前ニ舉ゲタ機械取扱職工カ相當ノ注意ヲ以テ執業セル際不幸ニシテ身體ノ平均ヲ失ヒ、其機械ノ危險ナ部分ニ觸レテ負傷シタコトガ、其業務執行ト必然ノ因果關係ヲ有セサルコトハ、恰モ機械取扱ニ關係ナキ他ノ職工カ相當ニ注意シテ其場所ヲ通行セル際不幸ニシテ身體ノ平均ヲ失ヒ、其機械ニ觸レテ負傷シタ場合ヤ、工場ノ階段ヲ昇降スルニ際シ失脚シテ負傷シ

タ場合ト同一テアツテ、共ニ業務執行ニ際シテ負傷シタト云フヘキテアル。同シ性質ノ負傷ハ其職工カ自宅ニ在ル際ニモ街上ニ出タ際ニモ起リ得ヘキモノテハアルガ、併シ作業ノ設備ニ危険ナモノガ多ク、加フルニ勢力ヲ集中シテ迅速ノ労働ヲ爲スコトヲ必要トスル所ノ現代の工場生活ニ在テハ、相當ノ注意ヲ用イテモ労働者ヲ負傷セシメルコトガ甚タ多イ。故ニ工場執業ニ際シテ起ツタ負傷ハ工場外ニ在ルモ起リ得ヘキ性質ノモノテアルトシテモ、尙ホ吾人ハ被害者ニ故意又ハ重大ノ過失ナキ限りハ之ヲ業務執行ノ爲メニ起ツタモノト見做シテ救済ヲ與ヘルノテアル。又負傷ハ即座ニ治療手當ヲ必要トシ、之ヲ怠レハ些細ナ負傷モ重大ノ結果ヲ生スルコト多キ故、責任ノ有無ノ問題ヲ離レ、苟クモ執業中雇主ノ眼前ニ於テ負傷ノ起ツタ場合ニハ、進ンテ之レニ手當ヲ加ヘルコトハ人情ノ要求スル所テアル。我工場法ニ於ケル労働者保護ノ目的ヨリ見レハ、矢張り労働者ノ故意又ハ重大過失ナクシテ業務執行ニ際シテ起ツタ負傷ニ對シテハ、汎ク之ニ扶助ヲ與フヘキモノト解釋スルコトカ穩當ブアラウ

(2) 次ニ労働者ノ疾病ニ付テ見ルニ社會的立法ノ大ニ發達ノタ國ニ於テハ、業務上ノ負傷ニ對スル賠償又ハ救済ヲ雇主ノ全責任トシ、從ツテ強制保險ノ成立スル場合ニハ其保險料ノ負擔ヲ獨リ雇主ニ嫁スルニ反シ、雇傭契約中ニ起ツタ労働者ノ疾病ノ救済ヲ雇主ノ全責任トスル所ハナイ。只タ強制保險ノ成立スル場合ニハ、雇主ハ國家ト共ニ其費用ノ一部ヲ負擔スルニ止マリ、労働者自身モ之ヲ負擔スルヲ通則トスル。是レ現代ノ工場生活ノ不健康ナルカ如ク、労働者ノ都市生活モ甚タ不健康ナモノテアツテ、工場執事中ニ起ツタ疾病ハ工場ニ在ラサル場合ニモ等シク起リシナ

ラント考ヘラルル性質ノモノモ多ク、又負傷ハ急激ナル身體ノ毀損テアルカラ其發生時點ノ執業中ナリシヤ否ヤヲ明確ニシ易キニ反シ、大多數ノ疾病ハ緩慢ナル身體ノ毀損テアルカラ其發生時點ヲ確認シ、若クハ更ニ溯テ其疾病ノ原因トナリシ事柄ノ發生時點ヲ確認スルコトハ殆ント不能ナル。又病原發生時點ノ何時ナルヲ問ハス、病勢カ進ンテ治療又ハ休養ヲ要スルカ如キ程度即チ常識ヨリ見テ疾病狀態ニ達シタコトニ付テハ、工場内ノ生活ト等シク工場外ノ生活モ其原因トナツテ居ルコトカ通例テアリ、從ツテ發病時點カ業務執行中ナルト否トニ由リ雇主ノ責任ノ有無ヲ決スルコトモ殆ント無意義テアル。夫故ニ強制疾病保險制度ニ於テハ執業中ト否トヲ問ハス汎ク雇傭契約中ニ疾病ノ起ツタ場合ニ雇主ヲシテ保險費用ノ一部ヲ負擔セシメルノテアル。要スルニ先進國ノ法律ニハ特定ノ中毒症ノ場合ヲ除キ一般ニハ業務上ノ疾病ナル觀念ナク、單ニ強制保險制度ノ下ニ於テ雇傭中ノ疾病ナル觀念アルノミテアツテ、之ニ關スル雇主ノ義務ハ負傷ニ關スルモノト大ニ趣ヲ異ニスル

我工場法ハ業務上ノ負傷死亡ト同様ニ業務上ノ疾病ナルモノヲ認メル。既ニ業務上ノモノト限ルトキハ之ヲ汎ク雇傭契約期間中ニ起ツタ凡ブノ疾病ト解スルヲ得サルハ明テアルカ、一面ニハ疾病ト負傷トノ性質ニ上述ノ如キ差別ノ存スル以上ハ、負傷ノ場合ノ如ク之ヲ執業ニ際シテ發生シタ凡テノ疾病ト解スルコトモ不當テアル。假令ヘ双方ニ關スル法文ノ字句ハ同一テアツテモ其意義ヲ機械的ニ同一ナモノト解スルハ當ヲ得ナイ。成ルホド今日篤志ノ雇主特ニ小企業ニ於テ徒弟的勞働者ヲ主人ト同居セシメ又ハ大工場ニテモ寄宿舎ヲ立テ、勞働者ノ世話ヲ引受ケ、其間ニ幾

分ノ主從的關係ノ存スルカ如キ場合ニハ、執業中ニ發生シタ疾病ニ對シテハ勿論、更ニ進ンテ雇傭中ノ一般ノ疾病ニ對シテモ相當ノ扶助ヲ爲シツツアルガ、此ノ如キ寛大ナ扶助ヲ工場法カ急激ニ一般工場主ニ強制スルモノト見ルコトハ穩當テナイ。多數ノ雇主カ任意ニ行ヒツツアル職工扶助ノ有様ヲ見テモ、通例人ノ注目ヲ惹キ易キト同時ニ緊急ノ治療ヲ要スル所ノ負傷ニ對スル手當ヤ治療ホド、疾病ニ對スル扶助カ行キ届イテ居ナイコトハ爭ハレナイ。果シテ然ラハ業務上ノ疾病トハ業務執行ト重要ナ因果關係ヲ有スル疾病、即チ工場執業カ主タル原因トナツテ起ツタ疾病ト解セチハナラヌ。此ノ如キ疾病ニハ急激ナモノト緩慢ナモノトカアル。例ヘハ工場内ニ傳染病毒ノ存在シタ爲メニ多數勞働者ニ感染シタ場合ノ如キハ概テ急激テアリ、工業原料トシテ水銀其他ノ激毒藥ヲ久シク取扱フタ爲メ中毒症ヲ生シタ場合ノ如キハ緩慢テアルカ、共ニ業務執行ノ爲メニ起ツタ疾病トシテ扶助ヲ與ヘネハナラヌ。固ヨリ多數ノ勞働者カ同一工場ニ執業シ、又同種ノ業務ヲ擔當スルモ罹病者ハ其中ノ少數デアリ、又此少數者ノ中ノ大部分ハ體質虛弱ナ者テアル。併シ乍ラ之ヲ以テ直ニ體質虛弱ト云フ主觀的事情ノ存スルコトカ主タル原因トナツテ疾病ヲ生シタノテアツテ、業務執行ノ當然ノ結果トシテ疾病ヲ生シタノテハナイト斷定シ、以テ雇主ノ扶助義務ヲ拒ムヲ得ナイ。若シ之ヲ拒ミ得ルトスレハ、實際ニ雇主カ義務ヲ負擔スル場合ハ殆ント起ラス、從ツテ勞働者保護ノ精神ハ破壞セラレル。特ニ注意スヘキハ本條ニ於テ負傷ト同シク疾病ニ付テモ職工ノ重大過失ノ有無ニ由リ雇主ノ義務ノ有無ヲ定メテアルカ、嚴正ニ云ヘハ輕過失ノ有無ト云フコトモ個々ノ職工ニ附着スル主觀的事實デアル。然ルニ輕過失ヲ爲スコトハ勞働ノ

激甚ナ現代の工場ニ於ケル多數ノ職工ニ免レ難キ所テアルカラ、法律ハ此ノ主觀的ナル經過失ノ存在ヲ理由トシテ雇主ノ扶助義務ヲ拒ムヲ得ナイコトヲ認タル以上ハ、罹病者ノ大多數ニ附着スル所ノ體質虛弱ト云ヘル主觀的事實ヲ理由トシテ扶助義務ヲ拒ムヲ得ナイコトモ勿論テアル。若シ此解釋ニシテ誤ナシトスレハ、今後雇主ハ自己ノ利害ヨリ打算シテモ他ノ勞働者ニ感柒シ易キ疾病ヲ有スル者ノ雇入ヲ避ケ、又疾病ヲ多ク發生スル有害ノ工業ニ於テハ勞働者採用ノ際ニ健康診斷ヲ行フテ虛弱者ノ採用ヲ避ケテハナラヌト同時ニ徹夜業ノ如ク勞働者ヲ疾病ニ罹ラシメ易キ作業方法ヲモ避ケテハナラヌ。

(3) 最後ニ業務上ノ死亡トハ執業中ニ發生シタル凡テノ死亡ヲ云フノテナク、業務上ノ負傷又ハ疾病就中前者カ主タル原因トナツテ死亡シタ場合テアツテ、通例ハ負傷ト同時カ又ハ其後久シカラスシテ起ルモノテアルガ、時トシテハ負傷後可ナリノ時日ヲ經過シテ起ルコトモアル。元來人間ノ壽命ハ無數ノ原因ニ支配セラレルモノテアツテ、負傷後速カニ死亡シタ場合ニモ、其主タル原因カ負傷テナイコトカアルト同時ニ、負傷後長時日ヲ經過シテ死亡シタ場合ニ、主タル原因カ負傷テアルコトモアル。法文ニハ負傷ト疾病ト死亡トヲ區別シテ並列シ、一見スレハ事故發生ト同時ニ死亡シタ場合ノミヲ指サウテアルガ、若シ重大ノ負傷後數時間又ハ數日ヲ經テ死亡シタ場合ヲモ單ニ負傷トシテ扶助スレハ足レリトスルナラハ、業務上ノ死亡ノ大部分ハ救済ヲ受ケ得サルコトトナツテ勞働者保護ノ目的ニ合シナイ。併シ長時日ヲ經テ死亡シタ場合ニモ之ヲ業務上ノ死亡トシテ雇主ニ義務ヲ負ハシムルコトモ困難テアル。此場合ニハ死亡ノ主因カ業務上ノ負傷ニ在

ルコトヲ立證スルノモ困難テアラウガ、此外ニ考フヘキハ負傷ノ重大ナ場合ニ於ケル雇主ノ扶助ノ主タル方法トシテハ一時資金給付ヲ爲スコトカ必要テアリ、終身又ハ長期ニ亘ル定期金ヲ之ニ負擔セシメルコトハ今日ノ實際ヨリ見テ困難ナル。然ルニ負傷者カ不具癈疾等トナツテ一時資金の扶助ヲ受ケ了ツタ後長時日ヲ經テ、更ニ死亡ヲ理由トシテ其遺族ヨリ扶助ヲ請求シ得ルモノトスレハ雇主ハ意外ノ困難ニ陷ラサルヲ得ナイ、此問題ヲ解決スルノ便法ハ扶助請求權ニ相當ノ期限ヲ付シ、其期限内ニ療養費休業手當等ノ扶助ヲ受ケツツアツタ職工カ其疾病負傷ニ由テ死亡シタ場合ニハ、其遺族ヨリ遺族扶助料ヲ請求シ得ルモ、其後ニ死亡シタ場合ニハ此請求權ナシトスルコトデアツテ、此ノ如キ制限ヲ勅令ニ由テ定ムルコトハ違法デナイ。何トナレハ扶助ノ程度方法手續等ハ凡テ勅令ニ讓ツテアルカラテアル。只タ本條ノ雇主ノ義務ノ性質ヲ損害賠償ナリト解スルナラハ、此ノ如キ制限ヲ勅令ニ由テ定メルコトハ不穩當デアラウ

三本條ノ適用ヲ受クル勞働者ノ範圍

本條ハ職工ニ對シテ適用セラレルモノテアルガ、職工ハ雇傭契約ニ由テ工場ニ勞務ヲ爲ス者ノ全體テハナイ。普通ノ大工場ニ於テハ支配人、書記、給事、門衛、掃除人夫等ノ如キ事務的商業的勞務ヲ執ル者カアツテ、其中ニハ普通ノ職工ヨリモ少ナキ報酬ヲ得ル者モアルガ、報酬額ノ小ナルニ由テ直チニ之ヲ職工ト稱スルヲ得ナイ。職工ト云ヘハ工場作業ノ本體タル工業的勞務ヲ爲ス者テナクテハナラヌガ、此種ノ勞務ヲ爲ス者ニモ職工ノ上ニ技師技手ノ如キ技術的役員カアリ、又職工ノ下ニ徒弟カアル。我工業界ノ實際ヲ見レハ甲工場ニ於テ見習職工ト名ツケル者ヲ乙工場

デハ徒弟ト名ツケ、一方カ職工長ト稱スル者ヲ他方ハ技手ト稱スルカ如ク、各工場ニ由テ命名ハ甚タ區區テアルガ、法律ノ適用ハ此ノ如キ個個ノ工場主ノ任意ノ命名ニ由テ左右セラルヘキモノナイ。工業的勞務ヲ執ル者ノ中工場法ニ規定セルハ職工ト徒弟トテアルガ、兩者ハ如何ナル意義ヲ有シ、他ノ被雇勞務者ト如何ナル區別ヲ有スルヤヲ知ルコトカ必要テアル

職工ハ工業的勞務ヲ爲スコトヲ其本務トスル被雇者テアルガ、其本務ノ側ハラニ他ノ事務的又ハ商業的勞務ヲ執ルノ義務ヲ負フモ職工タルヲ妨クナイ。職工ノ雇傭期間ハ通例短カク、或ハ期間ノ定メナク、又雇主ノ意思ニ由テ隨時ニ解雇シ得ルコトトシテアル場合モ少ナクナイガ、技師技手ノ如キ役員ハ長期ニ亘ル契約ヲ爲スコトヲ常トスル。併シ職工モ時トシテハ長期ノ契約ヲ結フ者カアル故、期間ノ長短ハ必シモ兩者ヲ區別スルノ標準トナラナイ。又役員ハ通例職工ヲ指揮監督スルコトヲ本務トシテ自カラ工業的勞務ヲ爲サナイガ、中ニハ自カラ製圖其他ノ高級ナル工業的勞務ヲ爲スコトヲ本務トスル者カアル。故ニ勞務ノ種類ニ由テ兩者ヲ區別スルコトモ困難デア。更ニ職工ノ報酬計算ノ標準ハ時間給、日給又ハ出來高抑テアルニ反シ、役員ノ報酬ハ少クトモ月給トシ、又年俸ヲ給スルコトモ少ナクナイガ、併シ職工就中長期契約ヲ有スル職工ニハ月給ヲ與ヘル場合モアリ、從ツテ兩者ノ區別ハ必シモ報酬計算標準ニ由ルヲ得ナイ。實際ニ或被雇者カ職工ナルヤ役員ナルヤノ問題ノ起ルハ、比較的高級ノ勞務ヲ執ル被雇者ニシテ長期ノ契約ヲ爲シ、且ツ其報酬モ月給ヲ以テ定メラルルカ如キ場合テアルガ、此ノ如キ場合ニハ其者ノ素養ヤ社會的地位ヤ工場ニ於ケル種々ノ待遇等ヲ綜合シテ判斷スルノ外ハアルマイ。尙ホ職工ノ少ナカラ

サル部分ハ別段ニ雇傭期間ヲ定メス、又其報酬モ出來高拂ノ方法ニ由ル者テアルガ、同シ方法ニテ報酬ヲ受ケ又同シ仕事ヲ爲ス者ノ中ニ家内工業者ト稱スル者カアル。此者ハ職工ノ如ク雇傭契約ニ由ラスシテ勞働請負契約ニ由ル者デアリ、從ツテ職工ノ如ク雇主ノ指圖ニ服シテ勞務ヲ爲ス者テナク、其結果雇主ノ工場内ニ於テ勞務ヲ爲サス、自宅ニ於テ之ヲ爲スコトヲ常トスル。是レ家内工業者ノ稱アル所以テアル。併シ名義上ハ勞務請負契約ニ由ルモ雇主ノ工場ニ留マツテ勞務ヲ爲ス者ハ、實際ニ就テモ雇主ノ指揮監督ニ服シツツ勞務ヲ爲シ、即チ雇傭契約關係ニ立テ勞務ヲ爲シ、事實ニ於テハ本條ノ適用ヲ受クヘキ職工テアルコトヲ常トスル

徒弟モ職工ト同シク雇主ノ指圖ニ服シテ工業的勞務ヲ爲ス被雇者デアツテ、通例ハ年少者テアル。併シ分業方法ヲ採ル普通ノ工場工業ニ於テハ幼少年ノ職工カ多イ。故ニ年齡ノ長幼ヲ以テ兩者ヲ區別スルヲ得ナイ。又徒弟ハ通例長期間ノ雇傭契約ヲ爲ス者デアツテ、民法第六百二十五條ニハ之ヲ商工業見習者トシテ特別ニ長期契約ノ有效ナルコトヲ認メテアル。併シ今日紡績及機械等ノ工場ニ於テ未成年ノ女工ヲ雇入ルルニハ長キ年季契約ヲ爲スコトカ多イ。若シ契約期間ノ長キヨリ此等ノ女工ヲ以テ職工ニアラス徒弟ナリト云フナラハ、工場法ハ根本ヨリ破壊セラレルコトトナル。何トナレハ工場法ノ保護ヲ加ヘントスル主タル勞働者ハ實ニ此等ノ女工テアルカラテアル。蓋シ徒弟ト云ヘハ修業ヲ主タル目的トシテ雇傭契約ヲ結フ者デアツテ、雇主ハ之ニ對シ契約上其業務ヲ教ヘル義務ヲ負フ者テアル。雇主カ之ヲシテ職工ノ如ク勞務ヲ爲サシムルハ即チ教育ノ義務ヲ果スノ一方法ニ外ナラナイ。故ニ雇主カ契約上ノ義務トシテテナク、單ニ自己ノ利益ヨリシ

テ被雇者ニ仕事ヲ教ヘテモ、之ヲ以テ徒弟ト云フヲ得ナイ。又徒弟ニ對スル雇主ノ教育義務ハ契約期間ノ全體ニ亘ルモノテアル故、彼ノ長期契約ニテ勞働者ヲ雇入レ、僅カニ最初ノ一二ヶ月タケ之ヲ教育スルノ義務ヲ負フモ、其後ハ比較的些小ノ報酬ヲ與ヘテ勞務ヲ爲サシムルカ如キ場合ハ眞ノ徒弟ト見ルヲ得ナイ。徒弟ハ雇主ヨリ食物住居ト衣服ノ一部ヲ給セラルルノ外別段ノ報酬ヲ受クルノ權利ヲ有セサルコトヲ常トスルガ、是レ雇主カ一面ニ教育義務ヲ負擔スルカ爲メテアル。被雇者カ契約上些小ノ報酬ヲ受クルノ權利アリヤ否ヤニ由テ必シモ常ニ職工ト徒弟トヲ區別スルヲ得ナイトシテモ、雇主カ此ノ此ク報酬ノ義務ヲ負フコトハ、被雇者ヲシテ勞務ニ服セシムルコトヲ主タル目的トシ、之ニ對シテ教育ヲ與フルノ責任ヲ負フト云コトハ、實際ニ名義的ノモノニ止マルニアラスヤトノ疑ヲ生セシメル。今日多數ノ織緯工業ニ於テ女工ヲ雇入ル、ニ二三年以上ノ期限ヲ以テシ、且ツ雇入レタ女工ノ大多數ハ業務上何等ノ素養經驗ナキ爲メ、雇主ハ最初ハ任意ニ之ニ教育ヲ與フルノミナラス、時トシテハ之ヲ教育スルコトヲ約スル場合モアルガ、雇主ノ目的ハ教ヘルヨリモ勸カシメルコトヲアツテ、勸カシムル爲メニ已ムヲ得ス教育スルノテアリ又被雇者ノ目的モ教育ヲ受ケテ將來之ヲ自己ノ職業トスルヨリモ寧ロ報酬ヲ受ケルコトヲアリ、特ニ女工ニ在テハ日常ノ衣食住ヲ得ル外ニ期限滿了ノ際衣服其他ノ嫁入道具ヲ貰ヒ受ケルコトヲアリ、從ツテ實際ニハ徒弟テナクテ職工テアルト云フ場合カ甚タ多イ。工場法ヲ適用スルニ方ツテハ必シモ契約上ノ名義ニ抱泥セス、實際ノ關係ヲ明カニシテ適用ヲ定メネハナラヌノテアルガ、此事タルヤ頗フル。困難ナ事業テアル一體小規模ノ商業ヤ手工業ニハ眞正ノ徒弟カ多ク存

在スルガ、工場工業ニ在テハ複雑ナ仕事ヲ數多ノ簡單ナ部分ニ分チ、其各部ヲ分業的ニ各労働者ニ行ハセルコトヲ常トスル。此部分仕事ノ中ニハ高度ノ熟練技能ヲ要スルモノモアルガ、其大部分ハ婦女少年モ短日月ノ練習ニ由テ之ヲ有效ニ行ヒ得ルカ如キ容易ナモノテアル。婦女少年ハ壯年男子ニ比シテ賃金カ低廉デアル故、雇主モ好シテ之ヲ雇用スル。是レ今日ノ工場ニ於テ女工及幼少年工ノ多大ナル所以ヲアツテ、彼等ハ徒弟名義ヲ以テ雇ハレテモ實際ニハ職工テアル。尤モ工場工業ニモ眞ノ徒弟カ皆無テアルトハ云ハレナイガ、實際ニ稀少テアルコトハ爭ハレナイ。眞ノ徒弟ハ工場法ノ適用ヲ受ケサル小規模ノ商工業ニ多ク存在スルモノテアル。故ニ予輩ハ工場法制定ノ當時工場労働ニ従事スル者ヲ凡テ職工トシテ一様ニ保護ヲ加フルノ必要ヲ認メ、若シ工場法中ニ徒弟ナルモノヲ認メテ一般職工ニ對スル制限規定ヲ之ニ對シテ除外スルナラハ、雇主ハ法律ノ制限ヲ免ルルカ爲メニ徒弟ノ名義ヲ濫用シ、之ヲ防止スルコトハ決シテ容易テナイ。故ニ徒弟ニ關スル法制カ必要テアルナラハ、工場法中ニ之ヲ規定スヘキモノテナク、汎ク小規模ノ商工業ニ適用セラルヘキ特別法ヲ制定スヘキコトヲ主張シタガ、此主張ハ顧ミラレスシテ今日ノ如キ工場法ノ成立ヲ見ルニ至ツタノテアル。本法第十七條ニハ徒弟ニ關クル事項ヲ勅令ニ由テ規定スルコトトシテアル。此勅令ヲ如何ニ定ムヘキヤハ別ニ研究ヲ要スル事柄テアルガ、既ニ職工ト徒弟トヲ區別シタ上ハ、工場法實施ノ監督ノ局ニ當ル者ハ名義上ノ徒弟カ果シテ眞ノ徒弟ナルヤ否ヤヲ明ニスル爲メニ非常ノ注意ヲ爲サネハナラヌ

二 工場法第十五條施行規則ノ制定

職工ノ業務上ノ災害ニ對シ工場主ハ如何ナル扶助ヲ行フヘキヤノ規定ハ、當事者ノ利害ニ甚大ノ關係ヲ有スルノミナラス、其ノ國民經濟ニ及ホス影響モ重大テアル。故ニ此種ノ規定ハ本來工場法ノ中ニ定ムヘキモノテアツテ之ヲ勅令ニ一任シタコトハ穩當テナイ。最モ工場法制定ノ際政府ハ鑛業法施行規則ノ定ムル鑛夫ノ災害扶助ト略ホ同様ノ規定ヲ設クルノ意思ヲ有スルコトヲ公ケニシタノテアツテ、今回左ノ如キ勅令案ノ要項ヲ公表シタ

一職工負傷シタルトキハ遲滞ナク醫師ノ診斷ヲ受ケシメ次項以下ニ定ムル所ニ由リ扶助ヲ爲スヘキコト、職工疾病ニ罹リ又ハ死亡シタル場合亦同様タルヘキコト

二職工負傷シ又ハ疾病ニ罹リタルトキハ其ノ療養ニ必要ナル費用ヲ負擔スヘキコト

三職工療養ノ爲メ休業ヲ必要トスル場合ニハ其ノ休業中賃金ノ二分ノ一以上ヲ支給スヘキコト但シ治療後三ヶ月ヲ經過シタルトキハ之ヲ三分ノ一二減スルヲ得ヘキコト

四不具癈疾者扶助料ハ大體左ノ程度ニ於テ之ヲ定ムヘキコト

(イ)終身自用ヲ辨スル能ハサル者

賃金百七十日分以上
賃金百五十日分以上

(ロ)終身業務ヲ營ムコト能ハサル者

賃金百日分以上

(ハ)自用ヲ辨シ業務ヲ營ミ得ルト雖モ身體健康ヲ傷害シ舊ニ復スルヲ得ス退業シタル者

賃金三十日分以上

(ニ)身體ヲ傷害シ舊ニ復スルヲ得スト雖引續キ從來ノ業務ニ服スル者

五職工死亡シタルトキハ遺族扶助料トシテ賃金百七十日分以上及葬祭料トシテ十圓以上ヲ遺族ニ支給スヘキコト

六遺族ノ範圍ハ職工死亡ノ當時死者ト同一戸籍内ニアル配偶者、子、父母、孫、祖父母、兄弟姉妹トシ又扶助ヲ受クヘキ遺族ノ順位ハ前掲ノ順位ニ依リ同順位内ニ於テハ男ハ女ニ、長ハ幼ニ、嫡出子ハ庶子ニ、庶子ハ私生子ニ先テ家督相續人ヲ最先トスヘキコト

七 賃傷シ又ハ疾病ニ罹リタル職工治療ニ至ラスシテ退業シタルトキハ退業後一箇年以内ニ限リ其ノ治療ニ至ル迄休業手當ヲ除ク外前數項ノ範圍内ニ於テ之ヲ職工ト見做スコト

八 前數項ニ掲ケタル扶助金ハ之ヲ給與スヘキ事由ノ發生シタルトキヨリ三個月以内ニ其請求ヲ受ケサルトキハ工業主ハ其支拂ノ義務ヲ免ルヘキモノタルコト

九 稼高ニ由リ賃金ヲ定メタル場合ニ於テハ前掲ノ賃金計算ニ付テハ事故發生前三十日間ノ賃金ノ平均額ニ依ルヘキコト

十 療養費及休業中ノ手當ハ毎月一回以上ニ分チテ之ヲ給與シ不具發疾者扶助料、遺族扶助料及葬祭料ハ一時ニ之ヲ給與スヘキコト

十一 工業主ト職工トノ共同ノ出捐ヲ以テ共濟ニ關スル仕組ヲ立テタル工場ニ在リテハ農商務大臣ノ認可ヲ得タル場合ニ限リ工業主ハ休業中ノ手當、不具發疾者扶助料、遺族扶助料及葬祭料ニ關スル規定ニ依ラサルコトヲ得ルコト

此ノ如ク本案ノ一項ハ扶助請求ノ手續、二項乃至五項ハ扶助ノ種類及程度、六項ハ扶助受領者トシテノ遺族ノ意義、七項ハ工場主ノ意思ニ由リ扶助義務ヲ終了セシメ得ル最低期間、八項ハ扶助請求ノ失權期限、九項ハ扶助金額ノ計算法、十項ハ扶助金支拂手續、十一項ハ形式上ヨリ云ヘハ除外例テアルカ實質上ハ扶助實行ノ特別ノ手續ヲ意味スルモノテアル。扶助ノ種類程度手續等ニ關シテ規定ヲ要スル重要事項ハ本案ノ如クシテ可ナリト信スルガ、其各項ニ付テハ修正ヲ要スル點カ少ナクナイ、是レヨリ其ノ重ナル點ヲ述ヘテ見タイ、

一 扶助請求ノ手續

之ニ付テ考フヘキハ工場主ト職工トノ何レカ撰定シタル醫師ノ診斷ニ由ルヘキヤノ問題テアル。大工場ニ於テハ常任ノ醫師カアツテ、職工モ其診斷ヲ受クルコトヲ便宜トスルテアラウカ、併シ醫師ノ撰定ヲ工場主ノ權限ニ一任スルコトスレハ、工場主ハ自己ノ雇醫師ヲシテ不當ニ疾病負傷等ノ事實ヲ否認セシムルノ危險カアル。去リ乍ラ職工カ自由ニ醫師ヲ撰擇スルナラハ反對ノ弊

害カ起ル。疾病負傷等ノ事實ニ付テ爭カ起レハ裁判所ノ判決ニ一任スルヲ當然トスル如クテアルカ、併シ之ヲ當然トスルナラハ、勅令カ扶助請求ノ手續ヲ規定スルノ必要モアルマイ。苟クモ之ヲ必要トスルナラハ、同時ニ醫師ノ撰定ニ關シテモ規定ヲ設クルコトヲ適當トスル。元來災害扶助ニ關シテ雇主職工ノ間ニ紛議ヲ生スルコトヲ成ルヘク豫防スルノ方法ヲ立テテハナラス。治療費ニ付テハ勿論日々ノ生活費ニモ缺乏ノ感スルカ如キ職工ノ災害扶助ハ迅速簡便ニ行ハレテハナラス。財力智力ノ低キ職工ハ訴訟ヲ起シテ扶助ヲ請求スルコトハ出來ナイ。又緊急ノ治療ヲ要スル場合ニ悠々ト訴訟ヲ起スノ追テ有シナイ。加之紛議ノ中ニ時ヲ經過スレハ災害ノ事實モ不明トナリ、後日之ヲ證明シテ扶助ヲ請求スルコトモ困難トナル。本來工場主ノ災害扶助ノ制度ハ資本勞働ノ衝突ヲ緩和スルニ付テハ重大ノ意義ヲ有スルモノテアルガ、其實行ニ關シテ紛議ヲ生シ易キ規定ヲ設クルトキハ折角ノ扶助制度カ却ツテ兩者ノ衝突ヲ激成スルノ原因トナル。此ノ如キ弊害ヲ防ク爲ニハ監督官廳ノ指定シタ醫師ノ診斷ヲ提出スルトキハ、工場主ハ之ヲ拒ムヲ得サルコトトスルヲ適當トスル。此方法ニ由レハ職工ノ側ヨリ不當ノ診斷ヲ提出シテ工場主ヲ苦シムルノ弊ヲモ防キ得ル。工場法ノ扶助規定ヲ以テ損害賠償ノ規定テアルトスレハ、此ノ如キ手續ヲ勅令ニ由テ定ムルコトハ穩當ヲ缺クテアラウガ、之ヲ以テ損害賠償ト異レル特別ノ扶助扶養ノ義務テアルトスレハ敢テ之ヲ不當ト云フヲ得ナイ。尤モ勅令ニ由テ此ノ如キ手續ヲ定メテモ、工場主カ疾病負傷ノ事實ヲ拒ムノテナク、其疾病負傷カ業務上ノモノナルコトヲ爭フ場合ニハ法律解釋ノ問題ヲ生スル故、勅令ニ由テ之ヲ豫防スルコトハ出來ナイ。

二 扶助程度決定ノ標準、

扶助ノ方法ハ治療費、休業手當、不具癈疾扶助料、遺族ノ扶助及葬祭料ノ給與ノ四種ヲアル。此各種ノ扶助方法ニ付テ研究スル前ニ先ツ一般ノ扶助程度ノ決定ニ付テ考ヘネハナラス。政府案ノ扶助ノ程度ニ對シテハ一面之ヲ以テ甚タ不充分トシ、他面ニハ之ヲ以テ過大トスルノ意見カアツテ、各相當ノ理由ヲ有スル。是ニ於テ治療費以外ノ扶助ノ程度ニ付キ輕重ノ等級ヲ設クヘシトノ論カ起ル。此等級別ノ標準ノ主ナルモノハ三種アル。甲ハ雇主ノ資力ノ大小ヲ標準トシ、乙ハ雇主ト職工トノ關係ノ親疎ヲ標準トシ、丙ハ災害ノ種類ヲ標準トスル。此他災害ニ由テ職工ノ蒙ムル實際ノ困窮ノ狀態ニ應シ、又ハ雇主ノ實際ノ資力ニ應シテ個々ノ場合ニ扶助ノ程度ヲ決定スヘシト云ヘル個別的取扱論モアル。扶助ノ精神ヨリ見レハ此論ニモ相當ノ理由ハアルガ、併シ此方法ニ由レハ非常ニ紛議ヲ生スルノ弊カアルカラ、寧ロ一定ノ客觀的標準ニ由ル等級別取扱ヲ爲ヘコトヲ適當トスル。等級主義ニ由ルモ扶助ノ重要項目タル治療費給與ニ付テハ各場合ノ實際ノ必要ニ應シテ決定スル故全然個別取扱ヲ無視スル譯テハナイ

工場主ノ資力ニ由リ等級ヲ設クルニハ、工場法適用範圍ヲ定メタ場合ノ如ク常時職工使用數ノ多少ニ由テ等級ヲ定メルコトカ適當テアル。此等級論ノ根據ノ主ナルモノヲ舉クレハ第一ニ本條ノ扶助カ損害賠償テアルナラハ、賠償者ノ資力ノ大小ヲ顧ルノ必要ハナイガ、之ヲ以テ特別ノ扶助扶養ノ義務ト解スルナラハ、扶助者ノ資力ニ相當スル義務ヲ負ハシメルコトカ適當テアル。第二ニ工場法ノ精神ハ云フ迄モナク職工ノ災害ニ由ル困窮ヲ救済スルコトテアルカ、資力ノ薄弱ナ小

企業者ニ對シ過大ノ負擔ヲ命シテモ、事實上效力ハナイ。特ニ我國ニ於ケル小工場ハ固定資本ヲ有セサル家内工業ニ對シテ僅カニ一步ヲ進メタ程度ノモノカ多ク、其作業ハ主ニ勞働ニ依頼シテ資本ヲ固定スルコト少ナク、從ツテ之ニ從事スル工場主ノ多數ハ薄資ナ者ナル。彼等ノ多クガ現ニ今日實行シツツアルカ如キ資力相當ナ扶助ヲ法定スルナラハ敢テ之ヲ拒マナイテアラウガ、若シモ法令ニ由テ資力不相當ノ大負擔ヲ命スルナラハ、彼等ハ初メヨリ法ヲ脱セントスルノ精神ヲ生スル。然ルニ此種ノ小工場ニ於テハ職工ハ工場主ト日常相接觸シテ人の關係ヲ有スル故、工場主ノ意思ニ反シテ其權利ヲ主張スルコトハ甚タ困難ナル。第二ニ各般ノ産業ニ付テハ産業革命ノ行ハレタ先進國ニ於テハ小工場ノ負擔ヲ資力相當ニ輕減シテ其存續ヲ圖ルノ必要ハ殆ントナイ。大小工場ニ對シテ一樣ノ負擔ヲ命スレハ小工場ハ生存競争ニ敗レテ一國ノ産業ハ生産能力ノ大ナル大工場ニ集中セラルル結果トナルガ、此事ハ同時ニ職工ノ爲メニモ利益ナル。然ルニ我國ニ於テハ先進國ヲ模倣シタ新式ノ工業ハ概テ初メヨリ大工場トナツテ居ルニ反シ、我國有ノ産業ハ一般ニ手工的作業ニ依頼スル不完全ナ家内工業組織ノモノナル。近來時勢ノ進歩ニ伴フテ次第ニ家内工業ヨリ小工場ニ進ミツツアルガ、此事タル一國ノ産業發達ノ爲メニ喜フヘキ現象ナル。然ルニ今此小工場ニ對シテ過大ノ負擔ヲ命スレハ、折角進歩シツツアル小工場ハ大ナル打撃ヲ受ケテ、工場法ノ適用ナキ家内工業ニ退歩スルコトトナル。先進國ニ於テ小工場ヲ倒ストキハ産業組織ノ發達ヲ來タスノ結果トナルガ、我國ニ於テ小工場ヲ倒スコトハ家内工業ヲ蹶躓セシムルコトトナリ、其結果ハ獨リ一國ノ産業ノ發達ヲ害スルノミナラス、職工階級ノ爲メニモ不

利益トナル。此等ノ理由ヨリ予輩ハ此等級別主義ヲ適當ト認メル。勿論等級ヲ適切ニ定メルコトハ難事デアツテ其區別ハ機械的トナルヲ免レナイガ、工場法ノ適用モ職工使用數十五人以上ナルヤ否ヤニ由テ機械的ニ定メタノデアツテ、此ノ如キ弊ハ等級別ニ免レサル缺點テアル。等級別ヲ採ルトキハ理論上數多ノ等級ヲ設クルコトヲ適當トスルカ如キモ、實際ヨリ見レハ職工數三十人以上ト以下トノ二級トシ、前者ノ負擔ハ政府案ノ程度トシ、後者ノ負擔ハ現行ノ鑛業法施行規則及官役職工人夫扶助令ヲ參酌シテ相當ニ之ヲ輕減スルコトヲ適當トスル

以上ノ如ク工場ノ大小ニ由ル等級別ヲ立テルコトハ必要テアルガ、其他ノ標準ニ由ル等級別ハ適當デナイ。先ツ工場主ト職工トノ關係ノ親疎ヲ標準トスル等級說ニ付テ見ルニ、此種ノ標準トシテ客觀的ノモノハ勤續時日ノ長短ニ由ルノ外ハアルマイ。災害扶助ヲ以テ損害賠償ニアラストスルナラハ、兩者ノ關係ノ親疎ニ由リ等級ヲ設クルコトハ一理アルガ、政府案ノ如ク扶助金額ヲ賃金ノ幾倍ト定メルトキハ自然ニ或程度マテ勤續時日ノ長短ニ準スルノ結果トナル。何トナレハ勤續年限ノ長クナル程賃金モ次第ニ増加スル場合カ多イカラテアル。又業務上ノ疾病ヲ予輩ノ解スルカ如ク業務執行ト密接ナ因果關係ヲ有スル疾病トスルナラハ、相當ニ長ク勤續シタ場合テナクテハ發生シナイコトヲ常トスル。只タ業務上ノ負傷ニ付テハ雇入後直チニ起ツタ場合ニモ之ヲ扶助セ子ハナラヌガ、負傷ニ付テハ既ニ論シタ如ク疾病ト性質ヲ異ニスルモノデアツテ、勤續ノ長短ニ係ハラヌ一様ニ之ヲ扶助スルコトヲ必要トスル。或ハ職工雇入ノ初メニ方ツテハ見習程度ノ者デアツテ其勞働ノ效果少ナク、雇主ハ往々損失ヲ忍ンテ之ヲ養成セ子ハナラヌノミナラス、之

ヲ募集シ來ルニ少ナカラサル費用ヲ要スル。然ルニ此ノ如キ職工ニ對シテモ充分ノ扶助ヲ爲スヘシトスルハ不公平テアルトノ反對說モアル。併シ論者ノ云フカ如キ事實ハ主トシテ纖維工業ニ於テ地方ヨリ女工ヲ募集シ來ル場合テアツテ男工ノ場合テハナイ。然ルニ種々ノ甘言ヲ以テ地方ノ婦女ヲ工場ニ誘ヒ來リ乍ラ、其災害ヲ顧ミナイト云フコトハ甚タ人情ニ反シ、又多クノ場合ニハ幾分カ背信ノ實ヲ免レナイ。職工ノ負傷ハ就業ノ初期ニ於テ仕事ニ熟練シナイ間ニ起リ易イノテアルガ、若シ雇主カ之ニ對シテ責任ヲ負ハナイトスレハ、扶助制度ハ甚タ不完全ナモノトナラザルヲ得ナイ。尙ホ災害ノ種類ニ由リ、就中業務上ノ疾病ト其他ノ災害トニ由リ扶助ノ程度ヲ輕重スヘシトノ說モアルガ、業務上ノ疾病ナル意味ヲ予輩ノ解スルカ如キモノトスルナラハ、扶助ニ等差ヲ設ケナイコトトシテモ、工場主ニ過大ノ負擔ヲ命スルコトトハナラナイ

三 扶助義務ノ履行ト雇傭關係

工場主カ罹災職工ヲ扶助スルハ之ト雇傭契約關係ヲ有シタ間ニ災害カ起ツタ爲メテアルガ、一旦ヒ扶助義務カ發生シタ上ハ之ヲ履行スルニ付キ最早ヤ雇傭關係ノ存續ヲ必要トスルノ理由ハナイ、職工ノ業務上ノ死亡ニ由リ其遺族ヲ扶助スル場合ノ如キハ、扶助者ト其受領者トノ間ニ雇傭關係ノ存在スルコトヲ必要トセサルハ無論デアルガ其他ノ扶助ノ場合ニ於テモ同様デアル。雇傭關係ハ職工ノ疾病負傷ノ治療ヲ必要トスル間ニ、當初ノ契約制限ノ到來ニ由テ終了スルコトモアリ、又特別ニ合意セル解約權ノ行使若クハ民法ノ規定ニ由ル豫告解約權ノ行使ニ由テ當事者ノ一方ノ意思ニ基キ終了スルコトモアルガ、負傷疾病ノ治癒ニ至ラサル間ハ凡テ此ノ如キ契約關係終了ノ

作用ヲ停止スルコトト定ムルノ必要ハナイ。政府案七項ニ山レハ原則トシテ扶助義務ノ履行ニハ雇傭關係ノ存續ヲ條件トスルカノ疑ヲ生セシメルノテアルガ、此ノ如キ條項ハ宜シク之ヲ削除シテ、別ニ各種ノ扶助義務ノ終了方法ヲ明カニ規定スヘキテアル。此ノ如ク規定スルコトハ紛議ノ發生ヲ防止スルニ必要テアツテ、一面工場主カ任意ニ扶助ヲ繼續スルコトニハ何等ノ妨ケヲ爲サナイ

四各種ノ扶助ニ關スル規定

政府案ノ扶助規定ヲ見ルニ此扶助ハ損害賠償ヲナクテ特別ノ扶助義務テアルト云フ精神カ充分ニ現ハレテ居ナイ。先ツ治療費及休業手當ニ付テ見ルニ工場主カ罹災職工ヲ病院ニ收容シテ治療ヲ爲ス場合ニハ、其治療費ノ中ニ當然生活費ヲモ含ムコトトナル。故ニ其職工カ扶助スヘキ家族ヲ有セサル獨身者ニシテ、且ツ入院中自己ノ住居管理費ヲモ必要トセサル者テアルナラハ、之エ休業手當ヲ給與スルノ必要ハナイ。又休業手當ヲ與フルニ付キ政府案ノ支給額カ普通ノ職工即チ扶助スヘキ家族ヲ有スル職工ニ對シテ適當テアルトスレハ、扶助スヘキ家族ヲ有セサル者ニ對シテハ過大テアル。過大ノ休業手當ヲ與フルコトハ職工社會ニ手當金詐取ノ惡風ヲ養生シテ道德上憂フヘキ結果ヲ生スル。故ニ休業手當金額ニ付テハ相當ノ差別ヲ設ケルコトヲ必要トスル。社會政策ヲ行フニ方ツテハ何ヨリモ先ツ職工社會ノ德義心ヲ維持スルニ付キ細心ノ注意ヲ拂ハチハナラス。職工ノ治療必要費ハ全然工場主ノ負擔テアル。故ニ工場主ハ自己ノ利益ヨリシテモ成ルヘク適切有效ナ治療ヲ施コシ、以テ其負擔ヲ輕減セントスル。從ツテ其治療ノ手段方法醫師等ノ決定ニ付

テハ工場主ニ多ク權利ヲ有セシメルコトカ利益ナルニ反シ、之ヲ職工ノ撰擇ニ任スルトキハ弊害
カ起リ易イ。尤モ工場主ノ中ニハ目前ノ小利ニ拘泥シ又ハ迷信無智ノ爲メニ不當ノ治療ヲ加へ、
之カ爲メ災害ノ結果ヲ重大ナラシメル危險カナイトハ云ハレナイ。故ニ工場主カ監督官廳ノ認可
ヲ得テ決定シタ治療ニ對シテ職工ハ異議ヲ唱フルヲ得サルコトトシ、以テ工場主カ危險又ハ不充
分ナ治療ヲ加ヘタリ、職工ノ一家ノ事情ニ頓着セス之ヲ強制的ニ病院ニ收容シタリ、又一面ニハ
職工カ工場主ノ撰レタ適當ノ治療休養ノ方法ニ違背シテ災害ノ結果ヲ重大ナラシメ、若クハ不必
要ニ治療費ヲ詐取シテ徒ラニ工場主ノ負擔ヲ増加スルカ如キ弊害ヲ防カ子ハナラヌ。

職工ヲ病院ニ收容シテ治療ヲ加フルカ如キ場合ヲ除キ、休業靜養ヲ必要トスル重大ナ負傷疾病ヲ
治療スルニハ、其治療費ト共ニ生活費即チ休業手當ヲ給與スルコトヲ必要トスル。貧困ナル一般
ノ職工ニ取ツテハ休業手當ヲ得サレハ治療自身モ不能トナル場合カ多イ。故ニ治療費ト同シク休
業手當モ雇傭關係ノ存續スルト否トヲ問ハス之ヲ給與セ子ハナラス。論者或ハ雇傭關係カ消滅ス
レハ職工ハ他ニ雇口ヲ求メ又ハ内職ニ由テ生活シ得ルニ係ハラス、舊雇主ヨリ休業手當ヲ食ルノ
弊カ起ル故、此手當ノ給與ハ雇傭關係ノ存續ヲ條件トスヘント主張スル。併シ雇主カ治療ノ實行
ヲ監督シテ之ニ必要ナ費用ヲ支出スル上ハ、其治療ニ休業ヲ必要トスルヤ否ヤヲ決定シ、一面ニ
ハ職工カ果シテ治療上必要トスル休業ヲ實行シツツアルヤ否ヤヲ監視スルコトカ當然テアル故、
論者ノ憂フルカ如キ弊害ハ工場主ノ注意次第デ防キ得ルノテアリ、又工場主カ不注意テアレハ假
令ヘ雇傭關係カ存續シテモ如上ノ弊害ハ防カレナイ。勞働保險制度ノ下ニ於テ保險金詐取ノ弊害

ヲ絶對ニ防止スルノ難キト同シク、休業手當ノ給與ニモ全然弊害ヲ生セシメサル方法ヲ見出スコトハ困難ナルガ、本來休業手當ハ普通ノ賃金ヨリモ遙カニ低ク且ツ時日ノ經過ニ從フテ漸次減少セラルル故、工場主カ相當ニ注意スレハ別段ノ弊害ハ起ルマイ

災害扶助ノ始期終期ニ付テモ研究ヲ要スル。僅々一二日以内ノ休養又ハ治療ヲ要スルニ止マルカ如キ輕微ノ負傷疾病ノ場合ニ、之ヲ理由トシテ一々扶助ヲ請求シ得ルニ於テハ、工場主ハ甚タ迷惑スル。第一其煩シキニ堪ヘナイト云フ說モアル。併シ業務上ノ疾病ヲ予輩ノ見ルカ如ク解スルトキハ、疾病ニ付テ此ノ如キ弊害ノ起ルコトハナイ。只タ問題トナルハ負傷ノ場合ニアルガ、之ニ付テモ醫師ノ診斷ト云テ扶助請求手續ヲ定メテアル上ハ別段ノ弊害ハ起リ得ナイ。反之扶助義務ノ終了ニ付テハ政府案ノ規定ハ不充分テアル。負傷カ早ク治癒シテ不具トナリシ者ニ與フヘキ扶助ハ政府案ニ由テ明カナルガ、久シク繼續シテ治療ヲ要スル場合ニ工場主ハ何時マテ之ヲ扶助セサルヲ得サルヤ。特ニ何時ヨリ之ヲ不具癱疾ト同様ニ取扱フテ義務ヲ免レ得ヘキヤハ政府案ニ由レハ不明ナル。治療手當テ中ノ職工ハ將來治癒スヘキヤ又ハ不具癱疾トナルニ至ルヘキヤハ、相當ノ日數ヲ經過スルモ之ヲ豫想シ難キ場合ヲ生スルガ、此ノ如キ場合ニハ六ヶ月經過後ハ工場主ハ何時ニテモ一定ノ一時資金ヲ給付スルコトニ由リ扶助義務ヲ終了シ得ルコトト定ムルノガ、獨リ工場主ニ取ツテ利益テアルノミナラス、職工ニ取ツテモ一般ニ便利ナル。此一時資金ハ症狀ノ輕重ニ由テ等差ヲ附スルヲ正當トスルヤウテアルガ、症狀ノ比較的ニ輕易ナ場合ニハ工場主ハ依然扶助ヲ繼續スルコトトナル故、一時資金ヲ與ヘントスル場合ハ實際ニハ重キ症狀ノ場

合テアル。故ニ此一時資金ハ業務ヲ營ミ得サル不具廢疾者ニ對スル扶助料ト同額ニ定メテ差支ハナイ。尙ホ罹災職工カ如何ナル程度ノ不具廢疾者トナリシカノ事實ヲ決定スルニ付テモ、扶助請求ノ手續ニ關シテ述ヘタト同様ナ紛議防止ノ方法ヲ設ケテハナラス

前ニ工場法ノ解釋ニ付テ述ヘタ如ク職工カ業務執行上即死シタ場合ニハ扶助ニ付テ疑問ハ起ラナイガ、業務上ノ負傷又ハ疾病ニ由リ久シク時日ヲ經過シタ後ニ死亡シタ場合ニ、工場主ハ其遺族ヲ扶助スルノ義務アリヤ否ヤハ不明テアル。施行規則ハ此點ニ付テ適當ノ規定ヲ設ケテハナラスノテアルガ、政府案ハ此點ニ付テ明了ト云フヲ得ナイ。職工ニ不具廢疾扶助料ヲ與ヘ又ハ前述ノ手續ニ由テ一時資金ヲ與ヘタ場合ニハ、工場主ノ扶助義務カ全ク消滅セルコトヲ明カニ定ムルナラハ、其後ニ起ツタ死亡カ業務上ノ負傷疾病ト因果關係ヲ有スルトモ、工場主ハ最早ヤ之ニ付テ扶助義務ヲ有シナイコトトナル。尙ホ遺族扶助ニ付キ内縁ノ妻ヲ以テ遺族ト見做スヘキヤハ問題テアル。職工社會ニハ内縁ノ妻ヲ有スル者カ頗フル多ク、其ノ公然届出ノ手續ヲ踏マサルハ道德上別段ニ咎ムヘキ動機ヲ有スルノテハナク、單ニ下層民ニ通有ノ怠慢ニ出ツル場合カ多イ。内縁ノ妻ヲ遺族トシテ取扱ハサルトキハ實際ニ困窮ヲ生スル場合カ多ク、之ヲ勅令ニ由リ遺族トシテ取扱フコトト定メテモ工場法ノ精神ニ反スルトハ云ハレマイ。只タ死亡職工ト性交關係ヲ有シタル婦人カ果シテ内縁ノ妻ナルヤ否ヤヲ確認スルコトハ往々困難テアリ、從ツテ之ヲ遺族ト見做ストキハ扶助制度ノ實行上屢紛議ヲ生スルノ危險カアル。資本勞働ノ調和ヲ圖ル所ノ扶助制度カ其規定ノ不備ナ爲メニ紛議ヲ生シテ兩者衝突ノ原因トナルコトハ避クテハナラス。加之我家族

制度ニ關スル國法ノ根本主義ヨリ見ルニ、特別法ニ由リ内縁ノ妻ヲ法律上ノ家族ト認ムルコトハ穩當ト云ハレナイ。工場法ノ規定ハ寧ロ職工ノ利害ニ訴ヘ、彼等ヲシテ將來婚姻ニ付キ正式ノ手續ヲ踏マシムルノ結果ヲ生スルカ如ク定ムルコトヲ適當トスル

五 扶助請求ノ失權期限

政府案八項ニ於テ扶助請求事由ノ發生後三ヶ月内ニ扶助ヲ請求セサレハ失權スルコトヲ定メタ。世間或ハ此期限ヲ以テ短カキニ過クルト批難スル說モアルガ、元來扶助ハ損害賠償テナクテ特別ノ義務テアリ、實際職工ノ困窮ニ陷レルモノヲ救助スルコトヲ目的トスル。一般ノ職工ハ日々ノ賃金ニ由リ生計ヲ立テル者デアツテ、災害ニ罹ツタ場合ニハ自ガラ治療シ又生活スルノ資力ナク速カニ工場主ニ扶助ヲ請求スルコトカ通例デアアル。故ニ罹災後三ヶ月ト云フカ如キ時日ヲ經ルモ尙ホ扶助ヲ請求セサル者ハ實際困窮ニ陷ラス、從ツテ又他人ノ救助ヲ必要トシナイ者デアアルコトヲ通例トスル。加之久シク扶助ヲ請求セサルトキハ扶助スヘキ事由ノ存在ヲ證明スルコトモ困難トナリ、徒ラニ紛議ヲ生スルコトカ多イ。特ニ多數職工ヲ使用スル現代の工場ニ於テハ職工ノ新陳交代カ頻繁ニ行ハレル故、長時日ヲ經過シタ後突然扶助ノ請求カ起ルトキハ工場主ハ迷惑ヲ蒙ラサルヲ得ナイ。故ニ失權期限ハ政府案ノ如ク短カクスルコトヲ適當トスル

六 共濟組織ニ由ル扶助ノ實行

工場主ト職工ト共同ニ出捐シテ共濟組織ヲ立テルコトハ社會問題ノ解決上重要ナ事柄デアアル。故ニ職工扶助規定ニ由テ此制度ノ發達ヲ害シテハナラヌ。是レ政府案十一項ノ設ケラレタ所以デア

ル。只タ本案ニ於テ農商務大臣カ共濟組織ニ由リ扶助ヲ行フコトヲ認可スルニ付キ何等準據スヘキ標準ヲ定メサルコトハ、行政權行使ニ對スル監督ノ放漫ニ失スル嫌カナイテハナイ。併シ各個ノ共濟組織ハ其救濟ノ種類方法程度等ニ付テ甚タ複雑ナモノテアツテ、大體ハ各工場特有ノ要求ヲ顧慮シタモノテアリ、從ツテ之ヲ法令ニ由リ一定ノ模型ニ改造セシムルコトハ適當テナイ。勿論法令ノ扶助規定ハ一般工場主ニ對シテ要求スヘキ最低限テアル。故ニ共濟組織ニ由テ行フ扶助ハ第一ニ少クトモ此最低要求ヲ充タスモノタルヲ要スルノミナラス、第二ニ工場主カ共濟組織ヲ利用シテ法令ノ命スル負擔ノ輕減ヲ圖ルコトヲ許ルシテハナラス。卽チ共濟組織ニ對シテ職工カ出捐スルコトハ法令ノ工場主ニ要求スル最低限ヨリモ扶助ノ程度ヲ更ニ大ナラシムルノ效果ヲ有セテハナラス。此兩點ハ自明ノ理テアツテ農商務大臣カ認可權ヲ行フニ方ツテハ、勅令ノ規定カナクトモ當然ニ注意スヘキ事柄テアルガ、此外尙ホ共濟組織ノ設立ノ爲メ職工ニ過大ノ負擔ヲ爲サシメ、特ニ救濟基本金ノ増加ト云ヘルカ如ク將來ノ職工ノ救濟ノ爲メニ現在ノ職工ニ過大ノ負擔ヲ爲サシムルノ弊ヲ防カテハナラス。又正當ノ理由ニヨリテ共濟組織ヲ解散スル場合ニハ政府ノ認可ヲ要スルハ勿論、其財産ノ處分ニ付テ制限ヲ加ヘ、之ヲ職工及一般下層民ノ利益ノ爲メニ處分セシムルコトヲ必要トスル